

無性性 (niḥsvabhāvatā) から事事無礙まで

——真諦三藏と初期別教一乗の教学——

大 竹 晋

智儼『五十要問答』三性三無性義は、真諦訳『撰大乘論釈』の三無性を釈し、「三性不有、成其無性。由自体定自、非有・有・不二・不尽、離分別故」(大正四五・五二四b)と述べる。「自体定自、非有・有・不二・不尽」とは、真諦訳が三無性を一体の非安立真如とし、有性(分別性・依他性)に非ず無性(無相性・無生性)に非ざる無性性(niḥsvabhāvatā)とすることを指す。而してこれは、『十地經論』初地の経偈、

自体本来空 有不二不尽 遠離於諸趣 等同涅槃相 非初非中後
非言詞所說 出過於三世 其相如虛空 (大正二六・一三三a)

の冒頭二句の取意である。智儼は『十地經論』初地見道の真如を、『撰大乘論釈』の無性性と解したのである。『搜玄記』も『論』云、自体空者有。此成無性性也」とし(大正三五・六三c)、初地の所得を「唯識三無性理」とする(同・五三c)。

智儼『孔目章』唯識章の結論部、「帰成第一義無性性 (Gaśa-mārta-niḥsvabhāvatā)」は、「諸法非有、唯一真如、無我実性、以為究竟。此是三乘義」(大正四五・五四七c)。という。これ

は諸法を「非有」と分別し、「非有・有・不二・不尽、離諸分別」なる無性性に至らぬ者を、三乗としたのである。智儼は無性性を、『華嚴經』の真如として別教一乗に含めていたのである。終教を「自非究竟」「由在名言語境界故」(同・五四七b)とするのも、終教が諸法を「真如」と言語安立するのを、非安立なる無性性から見て究竟に非ずとしたのである。頓教も絶言であるが、頓教が究竟なのではない(なお『起信論』は絶言真如も説くが故に頓教にも収むとする『五教章』の説は、智儼の説であろう。同・四八一c)。法蔵『探玄記』が、無分別智の相分見分の有無につき、「唯識論」中、或(護法)云、有智無境。以真絶相故。或(安慧)云、双泯。以境智相如故。今并四句皆得」(大正三五・二八一c)と、別教は有無の四句分別を皆得るとするの、『華嚴經』の真如が無性性で、有無が決定しないためと思われる。

さて経偈中間の「非初非中後」は、『五十要問答』(大正四五・五二六a、五二八c)『孔目章』(同・五六二b)に一乗の断

惑として、『一乗十玄門』(同・五一八 a) に初心成仏として引かれる。また最後の「出過於三世」「其相如虛空」は、論文に、

云何依。偈言「出過於三世」。転依止、依止常身故。非如無常意識智依止無常因緣法。(大正二六・一三三 b)

云何解脱。偈言「其相如虛空」。無一切煩惱障礙故。(同)

と釈され、『孔目章』唯識章は、

『地論』云、「十地転依止、依止常身故。非如無常意識智依止無常因緣法」。拠此文証、初地、即捨頼耶。(大正四五・五四七 a)

心相即空故、無所滅、是名為滅。故『地論』、「云何滅。如虛空」。

如是滅。(同)

と引く。智儼は心相が空で滅すべきものがないのを滅と言い、論文が煩惱障の滅を言うのを読み替えている。滅すべきものがないとは、転依の真如が空有不二の無性性であり、心相の有はそのまま空で真如だからである。この時一切の雑染有は本来空と知られ、雑染種子識としての阿頼耶識の意味は失われる。義湘『一乘法界図』も、

如『地論』説、「非初非中後。前中後取故」「云何断。如虚空」。如是断故、未断已還、不名為断。現断已去、名為旧来断也。(同・七一四 b)

と、旧来断を初地断已去とする。

真如たる無性性は、信満成仏の際にも証される。『孔目章』通観章は信満の梵行品の釈であるが、通観は『撰大乘論釈』

に「観通境、名見道」「能除三界通障、名見道」(大正三一・二〇〇 a) と、『仏性論』に「通道者、謂観真如、滅三界煩惱」(同・八〇七 a) とある如く見道を指す。見道は二回あるのである。『捜玄記』は梵行品に四尋思・四如实智・正観ありとし、正観を三無性観とする(『探玄記』大同)。これは初地の見道と等しい。そして「無念理観」当是自体果涅槃契因叙行也。即為此品宗」(大正三五・三五 b)「普賢証得自体円明究竟因果。此解約一乘耳」(同・三五 c) と言うが、「無念理観」は三無性観であり、梵行品の宗は、三無性観により自体本有の仏果を得ることに他ならない。信満の見道で三無性真如を証することにより、梵行品の「初発心時、便成正覚」もありうるのである。通観章は「無念理観」を「一無分別智定」と呼ぶが、これは義湘の三性説に、

証(三無性)・教(三性) 両法、旧来中道、一無分別。(大正四五・七一一 a b)

とある「一無分別」である。而してこの文は、義湘が一乗如実教門とする、

理事冥然、一無分別。体用円融、常在中道。(同・七一四 b)

に等しい。義湘は三性を「随情説事」、三無性を「随智顕理」とし、理・事を三無性・三性とするため、理・事の「一無分別」は、有性・無性の無分別たる無性性と判る(同・七一一 b)。無性性は『華嚴経』の真如のため、義湘は一乗如実教門

としたのである。なお証・教の中道は、『金剛仙論』が有相の言教法を無相の証法に含め、「此明中道之理」（大正二五・八一四c）と言うのを、無性性の表現に用いたのである。また通観章は「一無分別智定」を「拋其所剋、駐与頓教義同」（大正四五・五五〇a）とするが、これは禪の離言が非安立という点で無性性に通じるからである。更に通観章は『宝性論』の三種空乱意（実有法断滅後時得涅槃・以空為有物・離色等法別更有空）を離れよというが、これは三種空乱意が無性性の精神に反するためであり、『探玄記』はそれを受けて「自体本来空 有不二不尽」を三種空乱意の滅とする。このように初地と信満とに見道がある内、智儼が前者を重視することは、『孔目章』微細章が十地と十住との比較をし、十地を尊ぶことにより明らかである。

さて『孔目章』真如章は別教の真如を「円通理事統合無尽因陀羅及微細等」（同・五五八c）とする。この別教の真如は、初地の真如「自体本来空 有不二不尽」と同じであり、理（空）と事（有）との円通（不二）が無尽（不尽）の事の相即（因陀羅及微細等）、つまり十玄門）を起す様を指す。『法界図』は「自事以外、何処得理」「事事相即」（同・七一四b）とし、『探玄記』は「円通諸事統合無尽如因陀羅網及微細等」（大正三五・六三a）とする。後世にいう事事無礙である。『五教止観』も法界縁起の法を「全以無性性、為法也」とする（大正

四五・五一三a）。『孔目章』性起章は「離分別菩提心」（同・五八〇c）を言い、『搜玄記』は「名菩提心、為性起」（大正三五・六三a）とするが、この「離分別菩提心」は「非有・有・不二・不尽、離諸分別」なる無性性を知る心であり、性起は發菩提心時信満での無性性の証得と解される。信満後、十住から十地を速疾に経過しうるのは、無性性が事の相即を起すからである。

初期別教一乗は地論の撰論的解釈であり、『華嚴經』の説く事の無礙を、真諦三蔵の無性性により説明するのである。仏教の中国的改変という先入観に囚われず、古いインド三蔵の教えに基く唯識思想として、華嚴教學を捉え直す必要があらう。

（キーワード） 無性性、事事無礙、真諦三蔵

（筑波大学大学院）

（後記） 本稿を補完するものとして、『宗教研究』誌三三二号掲載予定の大竹「華嚴の三性説」があります。御併読下さい。